

物性研だより

第37卷
第2号

1997年7月

目 次

「遠くサイアムの地より」	石井武比古…	1
物性研の思い出	初貝安弘…	21
物性研に着任して	松田祐司…	23
物性研究所談話会		26
物性研ニュース		
○ 人事異動		28
○ 東京大学物性研究所 助手公募		29
○ 東京大学物性研究所 助手公募		31
○ テクニカル・レポート 新刊リスト		33
編集後記		

東京大学物性研究所

ISSN 0385-9843

「遠くサイアムの地より」

タイ国立放射光科学研究所

スラナリー工科大学 石 井 武比古

1. 御 挨 拶

物性研究所の皆さん、「物性研だより」の読者の皆さん、こんにちは。お元気で研究にいそしんでおられることと存じます。今、私は遠くサイアム(Siam)の国のコラート(khorat)という所より御挨拶申し上げております。正式にはナコン・ラチャシーマ(Nakhon Ratchasima)と呼ばれるこの地は、首都バンコクの北東250kmの位置にあり、飛行機で約40分、車で約3時間程度で着くことができます。

この地に東南アジア諸国で初めての放射光実験施設を作るのが私に課せられた役割です。最近、正式にはAcceleratorという専攻名になっている放射光科学専攻の大学院を作ることも役割の一つに加わりました。昨年閉所したソルテック筑波研究所にあった1GeVリングを入射用ライナック、ブースターシンクロトロンともどもいただきて、その主リングを設計変更して組立て、放射光の設備を作ろうとしています。今、阪大産研の磯山悟朗教授、明星大工学部の山川達也教授に手伝っていただいています。そのほかに、高エネルギー加速器研究機構の木原元央加速器研究施設長はじめ多くのスタッフの方々、SPring 8 の皆様方、広島大学の方々にも支援していただいております。

私達は、この計画に、サイアム・フォトン(Siam Photon)という名前をつけました。当地の人々はSiamをシアームと発音します。おわかりになりましたか。サイアムは、日本流に言えば、シャムのことです。この国が現在のタイランド(Thailand)に国名を変えてから、それほど長い年月が経過していません。それ以前には、この国はシアームと称していました。

「この国じゃ、シアーム・フォトなんて言うと、写真屋だと思われるだろうなあ。そんな名前の写真屋が、街中に、沢山あるからね」

そう言って、前所長のヴィルン・サヤカニット(Virulh Sa-yakanit)教授は笑いました。タイでは、最後のnは発音しないのです。私はサイアムという語の響きが気に入って、この名称を採用することを主張しました。サイアム・フォトン計画の中味についてここでお話しすることはしません。改めて別に報告したいと考えているからです。

「光陰矢のごとし」と言いますが、私が物性研究所を停年で退官してから、2年の歳月が過ぎました。この間に、第11回真空紫外放射物理学国際会議を主催したり、国連大学、高エネルギー物理学研究所共催のシンクロトロン放射利用者講習会を企画・実行したり、日本人事試験研究センターという団体で、地方公務員試験の採用試験問題のチェックをしたり、いろいろなことをしてきました

た。昨年3月より正式に現在の仕事に従事し、恵比寿にあるタイ王国大使館科学技術参事官事務所の一室を借りて事務所をかまえ、日本とタイの間を行ったり来たりしていました。そして、昨年12月18日より、当地に住むようになりました。上記の事務所は閉鎖しました。

物性研のみなさん、「物性研だより」の読者のみなさん。皆様方はタイのことをどの程度御存知ですか。「そんなものどうでもいいよ」などとおっしゃらずに、しばらくの間、私の話を聞いて下さい。ただし、私がこれからする話は、物性研究とは関係ありません。「バナナの実は先端を上に向けて生っているのか、下に向けて生っているのか」とか、「木の上で黄色に熟したもぎたてのバナナは美味しいか」、という類の話をするつもりです。どうぞ、興味をもって下さい。ちなみに、上の問い合わせの答えは、最初が「上向き」、後の方が「一日・二日経ってから食べる方が美味しい」です。

2. 朝焼け夕焼け

先日5月4日に時計を眺めたら、当地コラートでは、日の出が5時50分、日の入りが18時30分でした。その日の朝、5時20分を少々まわった頃、東の空に三日月状の細い月が残り、向こうの林の上の空が赤く染まっていました。コラートの地では、360度ぐるっと1回転しながら眺めても、山というものが目に入りません。

「ここじゃ、水資源の保全を子供達に教える時には、まず、山ってどんなものか、を教えるところから始めなくてはいけませんからね」

とは、同僚のイッティ氏の冗談です。本当に平地とはそういうものなのです。わが家の2階からは、日の出と日の入りの両方を完全に見ることが出来るのですが、やはり、家の近所の少々小高くなっている所から眺める日の出、日の入りの景色の雄大さは、形容の仕方を知りません。朝、地平線に赤い一点が現れるとき、夕方、地平線から最後の赤い一点が消えるのを見て、周囲に誰もいないブッシュの中で、一人で感激しています。注意しなくてはいけないのは、その辺には、蛇がいることです。体長2mくらいあります。

日の出と日の入りを比べると、日の入り、つまり夕日、の方が美しいように思います。特に、少々霞がかかっている時には、夕日は深紅で大きくなります。あれは美空ひばりの唄でしたでしょうか「真っ赤に燃える太陽だから,,,」というあれですが、「あの太陽はこんなのを指すのかな」などと思ったりしています。そして、日が落ちて、辺りが薄暗くなる頃、西の空は、広範囲に、赤く染まります。夕焼けです。茜色というのはこういうのを指すのでしょうか。今の日本でこの夕焼けの美しさを知っている人が何人いるだろうか、と思ってしまいました。高校生の頃習った漢詩「この中に真意あり、弁ぜんと欲すれば既に言を忘る」というのを思いだしているこの頃です。

同僚のヴィラポン・パイサン氏（臨時研究所長）が、

「この夕日は全く天下一品でね」

と自慢するだけのことはあります。後にも述べますが、昨年11月末に有名な観光地プーケット島に連れていってもらいました。その時、有名なプロンテ岬に、夕日を見に行きました。多勢の観光客が夕日の沈むのを待っていました。雲があって、条件は最高ではありませんでしたが、その時は、あまり感激しませんでした。むしろ、今から8年程前に、ホノルルのダイヤモンドヘッドの近くで泳ぎながら、海上で眺めた夕日の方が美しかった、と思いました。しかし、ここコラートの丘の上から眺める落日は、まさに、別格官幣大社なのです。

3. 果物

「所かわれば品変わる」といいますが、いわゆるタイフードなるものは私達日本人の知っている食文化とは全く異なるものです。そして、ここでお目にかかる果物も、また、私達にとっては、知られているようで、やはり知られていないものが多いのです。一年中あるのが、西瓜、パパイヤ、パイナップル、バナナです。季節物は、ライチ、ランブタン、ロンガン、ラムット、ランサート、マンゴ、ドリアン、マンゴスチンなどです。それにブドウとオレンジがあるのですが、どの季節に収穫されるのかわかりません。英語ではジャック・フルーツというカヌンも季節物なのか年中あるものなのかわかりません。なにしろ、私の感覚では、ここは一年中夏なのですから。

ココナツ、つまり椰子の実、も一年中ありますが、新鮮な椰子の実の中のジュースを飲むのを別にすれば、あれはココナツミルクを取るもの、と考えておいた方がよさそうです。バナナは、私の大惡意にもとづく言い方をもってすれば、象の餌なのではないでしょうか。

友人にそれを話すと、

「そんなことはないですよ。私だって生のバナナ食べますからね」

ということでした。タイのバナナは、短くて太くて、やや酸味がありますが、なかなかの代物なのです。バナナを加工したものは沢山売っています。バナナのフライ、焼きバナナ、干しバナナ、その他に、夜店で見かける何やらあやしいものetc.。この中で、焼きバナナ以外は、バナナの味がします。変わっているのが焼きバナナ。これは、一片を口に入れてみて、

「うむっ。これあ、焼イモだ」

そうです。焼イモとほとんど同じ味がします。多分青いバナナを焼いたものでしょう。こちらには紫色のサツマイモがあるのですが、その焼きイモ（かなり甘い）と食べ比べてみました。焼きバナナは、ほのかにバナナの香りがする以外、焼きイモと変わりありませんでした。私の舌には焼きイモの方が美味でした。

椰子の実の頭の部分を切り開いて、ストローを入れて、中のジュースを飲むのはどこにでもあり、屋台でも売っています。最初に経験したのは、ヴィルン先生が、磯山・山川両先生と私の3人をワットアルン、「暁の寺」、に案内してくれたときでした。

「喉が渇いたね。あれでも飲みますか」

と言って、例の椰子の実を買ってきました。飲みはじめて気が付いたのですが、これがなかなか大変なのです。椰子の実は丸くて大きいので、その中にはいっているココナッツ・ジュースも量が多いことになります。ほのかに甘い少々青臭い水を大量に飲んでいるのだ、と思って下さい。やっとの思いで飲み干し、屋台のゴミバケツの中に、実を捨てました。しばらくして、磯山教授がやって来て言いました。

「先生、私達の椰子の実ジュースの飲み方、間違ってるんじゃないですかねえ」

例の磯山調である。

「えっ。どうして」

「ヴィルン先生を見ていたら、椰子の実の内側をストローで突いて、何か白いものを削り取って食べていましたよ」

そうだったのです。椰子の実の核の内側には、白いジェリー状のものがついていて、それを吃るのです。後にブーケット島に行った時、あるビーチの小屋で休息しました。案内してくれた地元の先生が椰子の実を買ってきました。今度は、間違えないぞ、と自分に言い聞かせて、あの白いジェリー状のものを丁寧に削り落としました。何とも言えない味でした。美味しくもまずくもない、特徴がないものでした。くだんの先生が言いました。

「私達はこれでコレステロールを貯め込んでいるようなものですよね」

後日、私は過労がたたってか、急に血圧が高くなってしまいました。私を診察した心臓の専門家という女医さんが言いました。

「血圧が高いからと言って、心配するには及びませんよ。実は、私も高いんです。でも、一応、精密検査を受けましょうね。それに、あなたは太り過ぎです。毎日キャンパス内を歩き廻って下さい。一寸した努力です。あなた、ココナッツミルクはいけませんよ。あれを召し上がらないようにね」

「えっ、それじゃ、タイ料理食っちゃいけねえ、ってことなんだ!!」

しかし、私はそれを実行しました。血圧は下がりました。

ライチとランプタンは、皮をむいてしまうと、区別がつかぬくらいよく似ています。外見は違います。ランプタンの実は栗のいがのように毛が生えています。但し固くないので触っても痛くありません。ロンガンは皮をむかなくても、ライチと同じように見えます。皆さん、ライチが生っているの、見たことがありますか？ 大きな木から、ダンゴをつり下げたように沢山ぶら下がっているのです。マンゴスチンも、実は、ライチと同じ仲間です。外見は違っていて、暗赤紫色の皮をむくと、中から数個の白い食べられる部分（種つき）がでてきます。みずみずしく、わずかに酸味があり、すごく甘くて、さすがに、果物の女王と言われるだけのことはあります。残念ながらその木を見たことはありません。

日本で見ることがないものは、カヌンでしょう。これはドリアンと同じように大きな実で、木の

幹や太い枝からぶら下がるように生ります。実の表面はざらざらしていますが、ドリアンと違って、トゲのようなものはありません。大きな刃物で皮をむくと、中に、種を含んだ、黄色の、袋状の食べられる部分がつまっています。それを取り出すのは面倒くさい作業ですが、買えば、店の小母ちゃんが根気よくやってくれます。少々くせのある臭がしますが、甘味は非常に強く、美味しいものです。

今、マンゴの季節です。マンゴの実も木からぶら下がっています。沢山ぶら下がっていて、遠くから見ると、七夕飾りのタンザクのようです。マンゴはかなり青いうちにもぎ取ります。その状態で食べると、酸っぱい味がします。スライスして、甘辛いミソ（スーパーで売ってる）をつけて食べるのですが、これがビールにとてもよく合うのです。いくらでも飲んでしまいます。酸っぱいマンゴを細いタンザク（千切り）にして、カメに入れ、他の野菜やタマネギや何かの葉や実を混ぜ、唐辛子のみじん切りを入れ、何かの調味料を加え、すりこぎ棒のようなものでカメを突いて、材料のもつ汁を混ぜ合わせます。こうして出来るサラダは、何という名前か知りませんが、タイ料理のスタンダードです。六本木あたりのタイ料理の店でも食べることができます、本場物は、その味において、全く別の食べ物といっていいでしょう。この種のサラダはパパイヤでも作ります。

もいでから少し経つと、青いマンゴの酸味が消えます。この状態のマンゴのスライスもビールのつまみによいようです。10~14日くらいでマンゴの実は内部が黄色になり、例の甘い味になります。マンゴにはいくつかの種類があるようで、熟した20世紀梨のようにきれいな黄色の外見になるものと、くすんだ暗黄色になるものとがあります。前者は熟した状態でもかすかに酸味があります。このマンゴを小さい四角に切り、少々甘みをつけてふかしたモチ米と少々塩をえたココナツミルクといっしょに混ぜて食べます。これは、本来、デザートとして食べるもののですが、非常に美味しいものです。甘みは強いのですが、酒飲みのオッサンでも食べられます。もしこれを美味しいといいう女性がいたら（この仮定はそもそもナンセンスですが）、その人は女性ではありません。女性の姿をした別の生物です。マンゴの代わりにドリアンでもよいです。これもまた美味しい、どちらがより好きなのかは人の好みによって違います。私の住むコラートのある東北地方はモチ米の産地で、スーパーに行くと、炊きたてのモチ米とココナツミルク、それにドリアン、パパイヤをいっしょに売っています。

実は、我家の庭には、13本のパパイヤの木と6本のマンゴの木が植えてあります。小学校の学芸会のように、「早く実が生れ、マンゴの木、早く実が生れ、パパイヤくん」などとやっています。マンゴの木もパパイヤの木も私が日本に帰ってる間に運転手のサローさんが植えておいてくれました。1個だけ実が生っていたので、同僚のイッティさんに見せました。彼はいつものように、「いいですねえ」

から始めて

「先生、マンゴの実は、もぎ取る時期を見定めるのが難しいんです。いつまでもつけておくと、

腐って落ちてしまいますからね」

と注意してくれました。ある朝、見ると、たった一つ生っていたマンゴの実は腐りかけていました。運転手のサローさんにもらってもらいました。

マンゴの実をすりつぶして干し固めたものがあるのですが、それをスライスしたものも私の好物です。日本の干柿のような感じの味になります。

ドリアンのトゲのある大きな実を、刀のような刃物で切り裂くと、中から、バナナの実のような実が現れます。5～6個入っているように見えました。1本1本はバナナよりは太く、種があります。屋台でもスーパーでも、皮をむいて、身だけくれます。はじめから中身だけを売っていることもあります。屋台では、中味が気に入らなければ、別のをむいてくれます。

日本で売られている旅行ガイドブックを見ると、「ドリアンは果物の王様と言われるが、くせのある強い臭がある。慣れると病みつきになる」などと書いてあります。私が小学校時代の旧友達とチェンマイに旅したとき、どうしてもドリアンが食べたい、と言い張った男がいて、節はずれのドリアンを食べました。古くて美味しいのですが、果物の王様ですから、その貫禄は十分に残っていました。一人の婦人がドリアンに手を出しません。私は、

「食べてみろ。美味しいよ」

といいました。

「臭いから、いや」

「臭わないよ。本当だってば」

「それでもいや」

こういう会話が続いた後に、先に食べた友人達も一緒になって勧めました。遂に、彼女は、恐る恐る一片をつまみ、口に運びました。

「ほら、臭わないだろ。甘いだろ」

「うん」

この一連の経験から、私は、一般市民に原子力発電の安全性をわかってもらうのは大変なことだ、と考えを飛躍させました。私はいやな臭いのするドリアンを食べたことがないので、「ドリアンは臭くない、または、ドリアンはいい匂いがする」と言うことにしています。小林俊一先生のように、

「匂わないのはドリアンではない」

とおっしゃる強物もいることを付け加えておきましょう。蛇足ながら、ドリアンチップなるものが売られています。信じ難いことながら、ポテトチップと同じ様な味がします。

我家の常備食、スイカ、パパイヤについては詳しく申し上げません。スイカは黄色いのと赤いのがありますが、我が家では黄色いものを食べています。味に差はありません。パパイヤはどんなレストランでも出てくるデザートです。甘味は強くないのですが、あの柔らかい歯応えが何とも言えません。我が家ではローズアップルという果物もよく食べます。これもどこへ行っても一年中ある

ものですが、スーパーでは1個1バーツ(5円)のものと1個10バーツ(50円)のものが売られているのだそうで、我家では、高い方を買っているようです。ほのかに甘いのですが、それだけで10倍ほど値段が高いのです。これもシャリシャリという歯応えを楽しむものようです。

パイナップルの熟したもの、これは美味しい。大学の人事部長のスニーさんが面白いことを言いました。

「私、アメリカに留学したとき、パイナップルを食べようとしたの。そして、思わず尋ねてしまったわ。これはパイナップルなの、って」

「そりゃ、また、どうしてです？」

「だって、私、それまで酸っぱいパイナップルって食べたことなかったんですもの」

彼女に言わせると、ここコラート辺りでとれるパイナップルは最も味がいいのだそうです。でも私は彼女の言葉と違って、酸っぱいパイナップルにあたってしまったこともあります。

きりがないので果物の話を終ります。話さなかったものの中に、ラムット(卵型、皮薄い、柿の様な味、柔らかい)、リンゴのようなもので歯応えのみ楽しむもの(名前は知りません)、子供の頭ほどあるミカンのようなものなどです。ランサートは小粒の黄色い実で、ライチのような味で、ブドウのように実が集まっています。ブドウはマスカットで、値段が安いことを除けば日本ものと同です。柿はオーストラリアからの輸入品、リンゴは青森産でした。

今日、サローさんがやって来て、バナナを2本植えてくれました。どうやら台湾種のものようです。

4. 花

私は花オントで花の名前を知りません。しかし、我家の庭には常に10種類ほどの花が咲いています。そのうち、名前がわかるのは、バラ、ローズマリー、フェン・ハー、ジャスミンだけです。フェン・ハーの発音は大変むずかしく、正しい名称に対応する音を私の口から発することは不可能です。ブーゲンビリアとも呼ばれるのだそうで、同一の木から色の異なる花が咲きます。一年中咲いていて、とてもあでやかです。

ジャスミンの花にもいくつかの種類があります。我が家のは、白色、花のサイズの大きいのと小さいのと2種類あります。早朝、玄関前で散歩前の準備運動をしていると、非常に芳しい香がしてきます。小さいジャスミンの花を集めて、数珠のように輪にしたものを仏像の手などにかける慣わしがあります。線香(日本の花火のように細い竹の先についている)、蓮の花、金箔(仏様などに張り付ける)と共に4点セットになって、売っています。タイの人達には、仏像に限らず、この種のものをいろいろな重要な彫像に供える風習があるようです。チュラロンコーン大学の中心にあるチュラロンコーン大王の像、コラートの街の中心にあるスラナリー女史の像などがよい例です。

この小さなジャスミンの花輪はおまじないの役もしているようです。交差点に車が停止すると、

子供達がこれを売りに来ます。ドライバーはこの花をウインド・シールドのところに吊り下げます。日本でいえば、さしづめ交通安全のお守り、というところでしょうか。

大学のキャンパスの中を歩いて見ると、美しい花を沢山見かけます。2月末から3月にかけて、八重桜によく似た花が咲いていました。花はやはり熱帯地方の方が種類が多いのではないかでしょうか。

大学のキャンパスは広大です。外周でゆうゆう10Kmを超えるでしょう。我が家もキャンパスの中にあります。家賃はとられません。職場まで遠いのですが、毎朝、サローさんがトヨタのバンで迎えに来てくれます。同僚のヴィラポン氏が日々水蓮をくれることになっています。大きな塔らいを買わなくてはなりません。この水蓮がまた美しいのです。楽しみにしています。

5. お 犬 様

タイにやって来た観光客の方々は、犬が多いのに驚くことになります。それらの多くが飼い主のいない野良犬です。私の目には、「タイの人々は犬を虐待したり殺したりするのは罪深いことだ」と信じているように見えます。同僚のイッティ氏が教えてくれたところによると、タイには、

「犬を殺すと、来世ではその犬に生まれ変わり、殺された犬が自分に生まれ変わる」と信じている人々がいるのだそうです。

以前に、増加する野良犬を処分するのに、野良犬を捕えてワニ園のワニの餌にして、ワニの皮の輸出に役立てたらどうか、と提案して、評判を悪くした人がいたそうです。このような野良犬は、バンコックのような大都会にも、コラートの大学のキャンパスの中にも、屯しています。

都会の犬達は、日中はごろりと横になって目をつむっていたりして、とても怠惰に見えます。夜になるとワンワン、キャンキャンとうるさくなりますが、それは犬同士のケンカ、雌を追いかける雄、などの騒ぎです。田舎の犬は、近付く外敵、異物を威嚇ないし攻撃するために吠えています。私のように、散歩を日課とする人間にとって、これは大変困ったことです。彼等が屯するのは、食べ物のある場所にきまっています。大学本部、職員用カンティーン（窓やドアのない完全な吹き抜け構造になっている。生活の知恵というものでしょう）、農場の中、スポーツコンプレックスの建設者用飯場、それに私共の団地の中です。団地の中ともなると、飼い犬なのか野良犬なのか区別がつきません。何しろ放し飼いなのですから。

犬共は、私に向かって噛みつかんばかりに、襲いかかってきます。数年前に、私が今よりもっと元気だった頃、パリのチュイルリー公園の中を走っていて、大きなドーベルマンに吠えかかられたことがありました。その時は、思わず、

「オー、ノン、ノン、ノン。。。」

と言いつつ、立ちすくんでしまったのを憶えています。

タイの犬共は、顔つきは獰猛なのですが、体つきが小さいので、吠えかかられても何とかなる、

と思っていました。しかし、洗練されたパリジャンの犬と違い、この田舎者共は、あくまでもしつっこく、噛みつきそうにします。私は、負けづに、犬共に向かって、「ウワー、ワウ、ワウ。。。」と、大声で、奇妙な音声を発しながら、奴等を蹴散らしにかかりました。犬共は、一瞬ひるんだ様子を示し、吠えながら飼い主（?）の方に戻って行きました。

後日、学長のヴィチト先生に夕食を御馳走していただいた時、ロイヤル・プロフェサーが犬に向かって吠えかかった、と言ったら、大笑いになりました。タイでは、教授は国王陛下が任命します。学長は、私のことをロイヤル・プロフェサーと呼んで、ひやかします。この前、正式な辞令をいただきましたが、タイ語なのでなんと書いてあるのかわかりません。しかし、後になって、

「あの時本当に噛まれたら、どうなっていただろうか」

と思い、ぞっとしました。そして、その後、武器を携帯することを思いつきました。棒です。

先日の夕刻、団地の中を歩いて、道に迷いました。一軒の家から2匹の黒い犬が飛び出してきました。この前素手で蹴散らした奴等です。私は、例の奇声を発しつつ、棒を振り回しました。今度は、何故か連中もひるみません。最後は、棒を正眼にかまえ、後ずさりをしながら、遠ざかりました。

ほっとした次の瞬間、今度は、別の家から、3匹の犬が飛び出してきました。姿が野良犬とは違っているので、明らかに飼犬です。家の前で飼い主がこちらを見ていました。彼等はこちらを見ていたのですが、止めるどころか、けしかけているように見えました。近くの詰所から警備員の小父さんが加勢に来てくれましたが、手の施し様もありませんでした。吠える声につられたのか、犬の数も7匹ほどに増えしていました。結局、この時も、最後は、正眼後ずさりの術でピンチを脱しました。

大学内の私のオフィスで、茶のみ話に、このことを話題にしました。客のコンサルタント会社社長のクントン氏が言いました。

「先生、そういう時には、こうすればいいんですよ」

彼は手を差し出して、親指と人指し指、中指をこすりあわせる仕草をしてみせました。

「何ですって」

「ミートボールですよ」

「ミートボールって、何のことですか？」

「犬の好きな食べ物を与えるんです。その次からは、犬共はこれしながらやってきますよ」

彼はそう言って、尾を振る仕草をしました。私は

「これは大変だぞ」

と、思いました。私は、これから、こういう発想をする人達と契約を交し、商行為を伴う付き合いをしていかなければならないのです。

「武器は、棒より、ゴム銃の方がいいですよ」

彼は、私達が子供の頃パチンコと呼んだ簡単なゴム銃が如何に強力であるか、説明しました。石を使うより、先端を針状にした金属の方がより効果的であるとも言いました。

結局、私は武器を強化することにしました。つまり、棒を太く長くしたのです。太すぎると重すぎて振り回すことが出来ません。長すぎると、素早く振り回すことができません。何回かトライして気に入ったのを見つけることができました。今では、杖がわりにして、歩いています。

愚妻は、棒を持たなければ犬は吠えない、と言います。昨日、日曜日なのに、午後遅くなって、運転手のサローさんが、奥さんを連れて、庭仕事に来てくれました。彼は、私が雇っている庭師の仕事に満足していないようでしたし、ときどき植木をもって来てくれるのです。庭が、にわかに賑やかになりました。その時、私は、例の武器をもって、散歩に出かけようとした。棒をもっていかぬように、という愚妻の強い意見を無視して、私は歩きだしました。表の車道から団地の主要道に出たとたん、いつも私に吠えかかる2匹と鉢合せしました。私はそっと棒を隠しました。2匹とも、私を無視して、通り過ぎていきました。我が家の方から、笑い声が聞こえました。

武器を携帯するという私の基本姿勢は変わっていません。犬をけしかけて、他人が公道を通るのを妨げるような行為に屈することは出来ないからです。今朝、私は、昨夜の食べかすのカルビの骨の部分を袋に入れて持て出ましたが、敵に遭遇することはありませんでした。

6. チンチョとネズミ

私が大学の宿舎に入ることになったとき、数人の友人が、家の中にヤモリ(gecko)がいるが、無害なので、心配しないように、と言いました。地元の人はこのヤモリをチンチョと呼んでいます。正しい発音ではないかも知れませんが、私の耳にはチンチョと聞こえます。確かに無害と言えばそういうのですが、糞をまき散らすので、完全に無害とは言えません。この体長10cmくらいのチンチョが家の壁や天井を這いまわり、体に似合わぬ大きな声で、ケッケッケ、と鳴きます。彼等が虫を食べてくれるので、家の中が虫だらけになることはありません。夜、玄関のポーチの電灯をつけたままにしておくと、この明りを目がけて、沢山の虫が集まります。その虫を食べに、沢山のチンチョが集まります。虫の数はチンチョが食べ切れるようなものではないので、玄関の明りはつけないように心がけています。

チンチョはどこにでも出没します。部屋のカーテンを開けた時など、かくれていた2匹ほどのチンチョが走り去ります。先日、ベットのカバーをめくったら、チンチョが飛び出しました。庭の花壇やその辺りの雑草の中には、体長が30cmほどの大きな奴がいて、ケッコー、ケッコーと大声で鳴きます。地元の人は焼いて食べるのだそうで、朝迎えに来た運転手のサローさんが、草花の陰に潜んでいるのを先端に輪を作った糸を括りつけた短い釣竿を使って、上手に釣り上げました。彼は大学本部で私を待っている時など、前庭の中を動きまわって、チンチョ釣をしていることがあります。

チンチョのほかに、家の中には体長3mmほどの赤い蟻が入り込んで来ます。甘いものや何かの食べ残しなどをそのままにしておくと、そこが蟻だらけになります。非常に不愉快なのですが、我慢することに慣れました。台所の戸棚の脚の底に蟻よけのデバイスを付けましたが、効果が上がっているように見えません。

家の中には、サソリも居ます。暗いところに居るから気を付けるよう言われましたが、私は見たことがありません。私の家内もお隣のイッティ夫人も体長10cm程度のサソリを叩潰した経験があります。それ以来、彼女はサソリに似た姿の蟻を見つけると、サソリの子供だと主張してゆずりません。

我が家を悩ませているのはネズミです。ある朝、一階のリビング・ルームのテーブルの上や椅子に白い固体片が数多く散乱していました。見上げると、天井に4ヵ所ほど小さな穴があいていました。日中天井で何かをこするような音がしていた、と言います。ネズミではないかと思い、侵入場所を特定すべく、家の周りを点検しました。西側の壁の下の土の部分にちょうどネズミが入れるくらいの穴とそれよりかなり大きな穴がありました。翌朝も同じように白い破片が散らかっていました。同僚のヴィラポン氏によると、ネズミはトイレも好物なのだそうです。夜中に、一階のトイレの下から、カリカリカリと音が聞こえました。

運転手のサローさんにスーパーでネズミとりの毒を教えてもらい、それを買い求めました。サローさんは天井の板を外して、毒を天井に置いてくれました。ネズミの侵入口を塞ぐかわりに、そこにも毒を撒きました。効果があったのか、翌朝は、白い破片は落ちていませんでした。大喜びしましたが、二日目になると、また少々の白片が落ちていました。その後一進一退が続いています。今日、庭師に、穴を封鎖するよう話しておこうと思っています。

7. プーケット島での学会

昨年の11月の末に物理学会が開かれ、それに連れて行ってもらいました。会場となったノボテル・ホテルのあるプーケット・タウンは、有名なプーケット島の中心の街で、島の南の南東側に位置します。観光地である西側のビーチからはかなり遠く、車で30分ほどかかります。

タイには物理学会なるものは二つあるのだそうで、私が出席させていただいたThai Institute of PhysicsはNSTDA (National Science and Technology Development Agency)が後押ししているものらしく思われました。この学会は、物理学の研究成果の発表・討論というよりは、大学の教養課程や教員養成大学で物理学を教えている先生方の集会のように見えました。地元のRajabhat Institute Pucketという学校が、当番校として、会の世話をしていました。

プーケット島には夜になって着きました。出迎えに来てくれたラジ・バット校の先生の案内で、学長さんのところに表敬に行くことになりました。学生食堂のようなところに案内されましたが、そこで会食が行われていたように見えました。バンドが入っていて、歌手らしき人が唄っていました。

た。そこに集まっていた人の過半数は女性で、小母さん然とした人達がラフなスタイルで食事を楽しんでいました。

「いやあ、地元の皆さん方も、なかなかやるな」

なんて思いながら、楽しいパーティーに加えてもらえるものと早合点し、うれしくなりました。そして、機内食なんて残してくれればよかった、と後悔しました。

ところがである。私達が席に着く間もなく、善男善女は立ち上がって、私のところに来て挨拶し、会場より去って行きました。後には私達数名が残りました。歌手はまだ唄っていましたが、急に場の雰囲気が堅苦しい方向に変わっていきました。そのうち、一人の中年の婦人と紳士が合流しましたが、学長らしき人は来ずに終わりました。

翌朝、ホテルのビュッフェには、きれいな洋服を着た婦人が沢山いました。タイの婦人達のファッショナブルなこと、残念ながら、失礼ながら、平均すれば日本婦人より一枚上であるように思います。私の好みに合っている、と言い替えるべきかも知れません。その上、彼女等は美顔にして容姿端麗なのです。ビュッフェの婦人方のうちの何人かが、私に向かってニコやかに挨拶してくれました。年甲斐もなく、ジーンズに黄色のシャツという出で立ちで、すっかり観光客気分になっている私はうれしくなりました。私はヴィルン先生を探し、彼の席に加わり、一人の研究者に紹介されました。この人は、後に、私と二人だけで会った時、タイ王国の研究者の放射光科学に対する見解について私が持っていたイメージが大きく変わるほど重要な話しをしてくれましたが、その内容についてはここでは述べません。いずれにせよ、ここで、私は大変よい知己を得ました。

部屋に戻り、衣服を変え、ネクタイをして会場に行きました。会場では顔見知りが唯1人居ました。私達のグループの放射線安全管理担当のソンポーン(Dr. Somporn)氏です。彼は私を最前列の彼の隣の席に座るように招きました。席に落ち着いてから会場を観察しました。先刻、ビュッフェにいたご婦人達がいました。

「なるほど。あの人達は大学の先生だったんだ。それに、この国じゃ、学会の会場に来るのに、きれいな服着て、きれいにメークアップするもんだ」

正面の雛壇は、大きく立派で、講演者が座ったまま話すことを示していました。その左手に特別のデコレーションがありました。中央に高めの台の上に乗せた仏像があり、その両側に菊(?)の花が飾ってありました。菊の花の手前に、太い大きなローソクがあり、火がついていました。ローソクに囲まれて線香を立てる台があります。それら全体が一つの台の上に乗っており、その前にスツールがありました。この仏壇の左側に国旗、右側に国王の写真がありました。後で知ったことなのですが、この並べ方は偉さの序列の一つの表現なのだそうです。第一位が左側の国旗、第二位が中央の仏像、第三位が右端の国王陛下なのだそうです。国家に忠誠を誓い、それから仏教の教えを信じ、そして国王陛下を敬愛する。それがタイ王国の人々の信条である、ということでしょう。

ステージの右側にソファが置いてあり、そこにVIPが座っていました。我が友ヴィルン先生も

そこに居ました。彼はこの学会の会長なのです。正面にはThai Institute of Physicsと書かれてあり、その下にNational Science and Technology Development Agency, Rajabhat Institute Pucket, Novotel Pukhetという文字がありました。

「なるほど。あれが主催者と後援者だな」
なんて考えました。

いよいよ会が始まりました。ステージの下の左端に司会者用の立席テーブルがあり、そこに司会者が行きました。

「あれっ。あの人は、昨夜、後からやって来た御婦人だ」
立派なスーツに身を固め、まるで別人のような感じです。私は隣席のソンーポンさんに小声で尋ねました。

「あの人誰？」
「あの人はね。地元のプーケット・ラジャバット・インスティチュートのプレジデントです」。
「じゃ、あの人が学長さんなの」
「そう。そう言ってもいいですね」

学長は短く挨拶し、何かを言って、誰かを指名したようでした。ようでしたとは、私が想像したことの意味します。何しろ、私はタイ語を全く解さないのですから。以下の記述についても同様で、私の推察が混じっていることをあらかじめおことわりしておきます。さて、このコールに従って、全員が起立しました。VIPの1人が、左端に行き、盆のようなものを捧げ持つ女の子から何かを取り仏壇に近づきました。

「あっ、お線香だ」
彼は日本のものとはかなり異なった形の線香を持って、ローソクを使って線香に点火し、仏壇にそなえました。そしてスツゥールの前に跪き、祈りはじめました。これに合わせて全員が合掌しました。この儀式が終わった時、私は、

「皆、下を向いて目を閉じていたのに、どうしてリーダーが祈りを終えたのを知ったのだろうか」

なんて考えてしまいました。全員が合掌を止めたのは、リーダーが祈りを終えるのと同時だったからです。勿論、私は薄目を開けて、観察していました。

次でヴィルン先生が挨拶し、その後で基調講演がありました。当然、講師は立派な先生なのでありますと推察しました。先生の講演は、お坊さんが説教しているような調子で続けられ、OHP ヴューグラフは講演の終わりの方で現われました。それも物理学に関するデータのようなものではありませんでした。この講演に対する質疑応答は非常に活発で、それがとても印象的でした。

私は、ほぼ徹夜をして、Siam Photon計画のOHP ヴューグラフを準備していったのに、何も話さなくてよい、と言われ、少々がっかりしました。そこで

「これをあなたの話のときにお使い下さい」

と言って、OHP ヴューグラフをヴィルン先生に渡しました。そしたら、今度は、

「私の話しを聞く必要はないから、どこかに遊びに行っていなさい」

と強くすすめられて、その講演を聞かず終いでありましたから、私の準備したヴューグラフが使われていたのかどうか知りませんでした。後で尋ねると、

「使わなかった」

という返事がかえってきました。

学会が観光バスを用意して、島の観光に行ったとき、山の上にある風力発電所を見学しました。そこでは発電所の技師の講話があり、質疑応答が行われました。私もコメントを求められたので、省エネルギー技術、核融合炉材料、太陽電池など、材料開発にあたっての放射光の有用性を説きました。省エネルギーと放射光のかかわりは、間接的ながら、極めて深いものがあることを力説しました。この手のハッタリ的説明は大いに素人受けするものです。多くの女性の先生方が私が何者なのかを知り、私は彼女達の関心の的になった、とうねばれました。ある男性の先生は、この放射光研究の有用性と将来性の話が縁で、私のところの大学院に入学することになりました。勿論、その種の話の実現にあたっての事実上の功労者はヴィルン先生です。

学会の公式ディナー・パーティーは、一つの小さな島で行われました。ご婦人方はTシャツやジーンズ、スラックスなどのラフな服装に着替えてやって来ました。私は、やはり、Tシャツとジーンズで出てきました。美しい小さな島々や本島のビーチなどを眺めながら、約50分ほどで、目的の島に着きました。途中、ボートの上では、ビールやソフト・ドリンク、つまみ、などがサービスされました。

私は、後部甲板の仮設バーにジョニーウォーカー黒ラベルがあるのを見つけ、いち早くそこに行きました。女の子に

「ウィスキー」

と言うと、彼女はまずプラスティックのコップを取り、その中に氷を入れようとしました。

「ノーウ」

私は大声で言いました。彼女はボトルを取り上げ、ワン・ショット注ぎました。私は

「モア、ダブル、トリプル、モア」

などとわめいて、手真似でもっと液体の量を増すように要求しました。私の言うことをやっと理解した彼女は、ウィスキーの量を増やしてから、コップに水を注ごうとしました。

「ノーウ、ノーウ、ドント・ドゥー・イット」

私は再び大声で叫び、手を振りました。彼女は、怪訝そうに私を見て、そのままコップを渡してくれました。

「そうかあ。イギリス人が軽蔑するあの飲み物、日本人の偉大な発明品、“水割” ての、タイ

にも輸入されているんだ」

私はウィスキーを一口なめてみました。

「なぬー!! これあ、 ジョニ黒じゃねえ」

私の舌はジョニ黒の味だけは覚えているのです。

私達が着いた島には、 小高い山が一つあるだけのもので、 ビーチの類は全くありませんでした。山の中腹にホテルが一軒だけあり、 そこに広いテラスがありました。そのテラスがパーティ会場で、 ピュッフェ方式で、 3～4種類のタイ料理が置いてあったほかには、 メインの魚貝類のバーベキューがあるだけでした。しかし、 これが非常に美味しいです。本物のジョニ黒もありました。

最初のうち、 皆さんは、 向かい側の島の夕暮れの美しい景色を眺めながら、 美味しい料理を楽しみました。向かい側の島にも、 ホテルが一軒、 山頂にありました。真っ白の砂のビーチと椰子の木がうまくマッチして、 いい雰囲気を作っていました。テラスの一段上のポールの中央に小さなステージがあり、 若いミュージシャンが一人、 エレクトーンを弾いていました。

皆さんがそろそろ満腹になり、 まわりの島々が闇につつまれた頃、 高木研に来ていたあのドクター・ニコンがステージのところに行って、 マイクを取り、 何か言い始めました。これがミュージック・タイムの始まりで、 彼は司会者だったのです。それから多くの人達が、 入れかわり立ちかわり、 唄いました。演歌調あり、 ポップス調あり、 皆さんなかなか達者なのです。

「いやあ。タイの人って好きなんだ」

私はそう思いました。マイクを握ってはなそうとしない御婦人もいました。しばらくして、 ヴィルン先生がやって来て、 私に小声で言いました。

「そのうち、 私が指名されたらね。適当に挨拶して、 君を紹介するから、 放射光の話をしてください。」

「オー、 ノー。ユー・ドー・イット。イツ・ユー・ザット・メイクス・ア・スピーチ」と言いましたが、 心の中では

「エレクトーン伴奏にして、 放射光の話なんて出来る訳ねえだろ。この際、 マイク持ったら唄う、 それしかねえよ」

と思っていました。そして私の番がきて、 私は唄いました。

やがて、 一人の男がホールの中に飛び出して行って、 踊り出しました。それから一人、 二人、 と御婦人方が出て行って踊りはじめました。一人の婦人が私の前に来て頭を下げました。私は彼女と一緒にホールの中に出て行きました。それからは、 本当に入れかわり、 立ちかわり、 御婦人達に誘われました。

「うん。ここじゃあ、 女が男を誘うのだ」

なんて感心してしまいました。このことはどうやら正しいらしい。後で、 コラートで若い人達とカラオケ大会をした時もそうでした。若い講師、 大学院生、 秘書さん達、 その店のウェイトレスなど

女の子は誰でも踊ります。以前には気付かなかったのですが、彼女達の踊りは、指と腰をくねらす伝統的なタイの踊りです。私の秘書の話では、女の子は子供の時に訓練されるそうです。

ホールの中は、多くの中年男女でいっぱいになり、さながらゴーゴー大会のようになりました。男共は、私達のほかにこのテラスで食事していた唯一の団体客、台湾の人達、中の女性をつかまえて踊っていました。食べる、歌う、踊る、というこの順序は、どうやら、かなり一般的なものであるようです。

このようにして夜が更けていきました。突然、司会のニコンさんが、改まった調子で何か言いはじめました。急に静かになりました。一瞬

「おひらき、かな？」

と思いました。すると一同起立し、直立不動の姿勢をとりました。エレクトーンから国歌が流れできました。国歌演奏の終わりがパーティの終わりでした。ここに来た時、底が見えていた桟橋の下はもう完全に満潮の水の下になっていました。

翌朝、ヴィルン先生から、午後バンコックに戻る前に、例の学長先生さし廻しの車で、島の観光に案内してくれるから、行きたいところを考えておくように言われました。私はホテルの部屋でトラベルガイドブックを広げ、2日前の観光バスが行かなかったところを拾いだし、頭にたたきこんでから、帰り支度を済ませ、町の見物にでかけました。

そこは何の変哲もない田舎街でした。それにしても日中の街は暑い。私は歩きながら、同僚のヴィラポン氏に言わされたことを思いだしました。

「日光に曝されながら15分以上歩くと、危険ですよ」

明らかに、私はこの忠告を無視することになりました。気になったのですが、何でもありませんでした。

ホテルに戻ってから、会場に行って見ました。ちょうど会が終わって、皆さんが会場から出てくるところでした。ヴィルン先生のところに行くと

「一件キャンセルがあったので、1時間ほど終了を繰り上げてね。皆さんにショッピングをしてもらえるようにね。私も行くんだけど、君も来る？」

「お伴しますとも」

目指す店はホテルの近所の土産物屋さんでした。観光バスが客を連れてやって来ただので、きっと有名な店なのでしょう。その店はカシューナッツの専門店のようで、各種とりそろえて、カシューナッツが沢山ありました。土産屋さんなので、他の商品もおいてありますが、目玉商品で大量にあるのはカシューナッツでした。

「この豆はプーケット島名産でね。安いから君も買って行ったら？」

「いや、私は見るだけで結構です。」

コラートで、ヴィラポン夫人がカシューナッツの食べ方を教えてくれました。生のナッツを薄

く油をひいたフライパンで炒める。炒り上がったら塩をまぶす。それだけです。熱いうちは柔らかくて、生のものとさして変わらないのですが、冷えると、固くなつて独特の歯応えがあり、實に香ばしい、美味しい味になります。珍味といつてよいと思います。愚妻が、カシューナッツをそのまま生で食べていたと言つたら、ヴィラポン夫人は、目をまるくして、驚いたそうです。カシューナッツを甘味と胡麻で包んだ中国風の菓子がありますが、それも「止められない、止められない」の類の美味な食べ物であることを付け加えておきましょう。

さて、土産屋の中では、顔見知りの婦人達が買い物をしていました。例外なく、店の女の子に籠をもたせ、あれを取れ、これを入れなさい、と命令したり、何がいいのかアドバイスをもらったりしていました。買い込んだ大量の土産はその場でダンボールに詰め込んでもらっていました。こうすると、飛行機に乗る際に、荷物をチェックインするのに便利であるということが後でわかりました。

「この店はね。学会参加者に6割引と8割引セールをしてくれるんですよ」

「へえー、それで、皆さん、あんなに買い込んでいたんですね。平均して皆さんはどのくらいお金使っているんですか、あの店で」

「そうだなあ。300から400バーツ(1500~2000円)ってところかな」

午後訪れたビーチは全くツアーガイドブックにあるとおりの風景でした。思ったより人が少なく、以前に行ったパタヤビーチよりはこちらの方が上等であると言えるでしょう。特に、最初に訪れ、空港近くの浜が印象的でした。椰子の林の中に点在するバンガロー。後背地の公園。椰子林の先のビーチ。砂浜に根元から倒れて波に洗われている巨木。北側に2Km~3Km位続いている白い砂浜。南側の突き出した半島と断崖。そして、何と言っても感激的のは、人影のほとんどいない、この広大な海岸線です。倒れた巨木の前を2人の子供が通り過ぎた時、突然、私の頭を何かがたたきました。

「あっ、そうだ。これあ、テレビのコマーシャルで見たあの景色だ」

そうです。これは東京でもバンコクでも見たことのあるあの景色だったのです。

一つのスポットから他のスポットに移動する間に通過するゴム園、椰子の林、バナナ園、水田、そして賑を見せる村の市場、このような場所を観光客が通ることはまずないのではないでしょうか。

予定地をすべて見てしまった後、まだ、少々時間が残っていました。私達は空港の方に向かって走っているうち、急に車のスピードが上がったように思いました。しばらくして、案内の先生が言いました。

「この車は今、東に向かっています。ヴィルン先生とも相談したんですが、先生に東側の海岸も見ていただきたいと思いましてね」

「それは、ありがたいことですな。ぜひ連れて行って下さい」

これは思いがけないことでした。ガイドブックによると、島の東側は泥の海で、見るべき何物もな

い、ということであったからです。ただ、島の東北部の山は高いらしく、滝がいくつかある、と書いてありました。私は、それらの山中の何かが見られるのではないか、と期待しました。途中、アイスクリーム売りに会いました。アイスクリーム売りは、オートバイの後やサイドカーにアイスクリームを入れた箱を乗せ、きれいな童謡のようなメロディーを流しながら、客を呼ぶのです。ヴィルン先生ですら、高校生の頃は、あのメロディーを聞くと、心がときめいた、と言っています。

「それにしても、何故、人っ子ひとりいない山道にアイスクリーム売りがいるのだ？」

答は車中の誰も知りませんでした。

私の期待に反して、連れて行かれた所はやはり海岸でした。海岸に出る前に、マングローブの森を通り過ぎました。案内の先生はこれを見せたかったのではないか、などと思ってしまいました。彼も若干興奮気味だったからです。淡水と海水が接する非常に特殊な環境のもとでしか成長しないマングローブの森が破壊され、エビの養殖場になっている姿を見て、日本人として恥ずかしく思いました。

私達が行った所は、陸地がやや海に突き出た地形をしており、数本の椰子の大木の下に粗末な木製のテーブルと椅子がありました。何かの草で葺いた屋根をもつ小さな小屋が1軒あり、そこが調理場のようでした。泥の海とよばれた海岸は、実は干潟でした。

「そうか、彼等、の言うマディン・ビーチ、泥の海、とは干潟のことだったんだ」

潮が満ちてきたら根元が完全に水に隠れるであろう一本の大木、それはマングローブの木によく似ているのですが、それが泥土の中に幾筋もの太い根をひろげていました。あたりは、小さなカニや、いろいろな虫のような生物が無数にうごめいていました。それをねらって、鳥達が集まってきていました。前方の海の部分は狭い海峡になっていて、すぐ目の前に、向こう側に本土の緑の山々が海岸線まで迫っていました。

「うーん。これあ、絵だ。絵画の世界だ」

私は、こういう所にはいつまでも観光バスが来ないことを願っています。

椰子の木の下のテーブルでは、私達のほかに、2組の地元の人達がビールを飲んでいました。案内の先生が注文した料理が来る前に、上半身裸で、腰に布を巻つけた一人の中年男が私達のところへやって来て、丁寧に挨拶しました。案内の先生は、男に、この方々はバンコクと東京から学会のためにやって来た、物理学のプロフェッサーである、と英語で話しました。男は店の主で、この案内の先生の学生であった、ということです。

出てきた料理は一生忘れないでしょう。私の人生中に経験した指折の味です。とは言っても、出てきた物は単純で、焼いた山盛りのエビ、焼いた子持ちのカニ、焼いた大きな魚にいろいろな野菜果物で作った具をかけたもの、焼きメシ、それに焼いたホイ・チャック・ディーンです。ホイ・チャック・ディーンは殻の長さが5~10cmほどの巻貝で、ツメがでています。それを摘んで引っ張ると身がでてきます。それを特製のソース（形式的にはどこにでもある典型的なナンプラー・

ソースですが) にちょっとつけてから食べます。その何とも言えない味については、本当に、美味しいという以外に表現する言葉を知りませんので、何も言えません。

バンコクに戻ってから、私達の研究センターのバンコク・オフィスがある、チュラロンコーン大学の学生達に、カニの味、エビの味、すばらしい魚の味、そしてホイ・チャック・ディーンのことを話しました。

「君、ホイ・チャック・ディーンって知ってる?」

「いいえ。何ですか、それは」

会話はこうなってしまいます。私はホイ・チャック・ディーンの説明にかかります。彼等は納得したような顔をしません。しかし、遂にホイ・チャック・ディーンを知っている学生が1人現われました。

「ああ、あれですか。私、食べたことがあります。ちょっと変った味がしますよね」

それから彼女がホイ・チャック・ディーンの説明をして、私が嘘を言っているのではないことが説明された。私とヴィルン先生の間では、その後「ホイ・チャック・ディーン」というのが珍味・美味の代名詞になってしまいました。

8. 女性の国

タイは女性でもてる国と言われます。実際に、女性の社会進出は目覚ましく、私も、上院議員の方とか、財界の人とか、すばらしい女性と知り合いになることができました。しかし、本当にすばらしい女性だな、と思うのは、私達が日常生活で普通に付き合っている普通の婦人達です。彼女等は容姿美しく、快活で、働き者なのです。以前に飛行機の中で知り合った工場を経営しているという紳士に尋ねたことがあります。

「タイの人達はどうですか。働きますか」

「ええ、よく働きますよ。実にいい。すばらしいです」

「そうですかねえ。私の知っている連中は違うんですけどねえ」

「そんなことないですよ。とてもよく働きますし、新しいことにも積極的に取り組んでくれますしね」

「それって、もしかしたら、女性達のことじゃないですか」

「そりゃそうです。男共は駄目だ。連中は××××だ。そうです。あの国は女でもてるんですよ」

先日、私はASEAN Regional School on the Applications of Synchrotron Radiation という講習会をコーディネイトしました。これにACFA会議を合流させていたので、私の生活はしつらわめっちゃかになりました。はじめ私はこういうことは、何なくやれるし、自分には十分の経験があると信じていました。しかし、それは錯覚でした。

東京では、私の周りには、森多美子さんや、栗原紀子さんや、小林洋子さんや安居院あかねさんなど、という御婦人方がいて私を助けてくれました。私の思っていることをほんの少し話ただけで、あとは完璧に片付けてくれていました。物性研究所にはそういう女性達がほかにも居ます。私の知っている人だけでも、理論の丸山さん、事務室の吉田さん、鈴木さん、図書の井上さんなどです。理論の先生方はいかに丸山さんのおかげをこうむっているか、よく自覚なさっている筈です。

ところがです。いくらタイの女性がすばらしいと言っても、知らぬことは出来る筈がありません。私は、石井流の仕事の仕方と仕事の中味を教えないかもしれませんでした。ところがです。この石井流というのがタイの風土と文化になじみません。これが苦勞の始まりでした。これ以上は稿を改めて書きましょう。一つだけ言えば、私も少々タイの人のようにになってきた、ということでしょう。

一度仕事を覚えると、彼女等の仕事ぶりは大変すばらしいものになりました。大変な作業だったのは、次々に現われる講師の先生方のOHP ヴューゲラフをコピーし、短時間で全参加者に配布することです。これを実に手際の良い分業作業でこなしていました。夜遅くなっても平氣でした。その間のペチャクチャ。アハハハ。これは万国共通です。何しろ女性が3人以上集まっているのですから。

カラオケでもディナーでも、男子をリードしているのは彼女達です。彼女等が健全なかぎり、タイ王国の前途は洋々としていると思うこの頃です。

9. 後書き

私の今回の話をここで止めます。物性研のみなさん。「物性研だより」の読者の皆さん。私が、タイの人達のものの考え方、科学的研究に対する態度、それにタイ料理一般について述べなかったことにお気付きですね。わざわざそうしました。それらについて、もう少し責任をもって何かを言うためには、もっと見極める必要があると思ったからです。それでも冗長になったこの一文の筆を置くに当たって私の今の感想の一つ、憎まれ口をたたくことにします。

「うん、東京の人達は可哀そ.udan、こんな〇〇しか食べられないんだからな。東京の人達が自から好んでこんな〇〇をたべてるんじゃないよ。きっと、誰かが世の中を変えちゃったんだ。これが〇〇の味だなんて、可哀そだ」

では皆さん、さようなら。お元気で。(答:〇〇は果物) (5月17日脱稿)

物性研の思い出

東京大学大学院工学系研究科物理工学科 初貝安弘

助手としてお世話になりました物性研を離れて本郷の工学系研究科物理工学科に出戻ってからはや2年以上経ちました。そんなある日、編集委員の方から物性研での思い出その他何か書いて下さいとのご依頼がありました。この手の文章は私の全く不得意とするところなのですが、過去の記事を読んでおりますとその当時の様子が感じられ私の個人的な思い出を書くのも私の過ごした時代の若手からみた一側面の記録となるかもしれないと思いまして拙文を書かせていただくことにいたしました。

私が物性研、理論部門、甲元研究室の助手として採用していただいたのは1989年の春でした。当時からの数年は、高温超伝導の過熱状態で関連するいろいろな理論がたくさんでて、またそれが物性プロバーの研究者だけでなく素粒子関係の研究者を含めていろいろな分野の人々の混合状態となっていた非常に混乱したというか楽しい時代であったことを覚えております。私自身、いまやスタンダードなモデルであるハバードモデルからいわゆるフラックス状態、カイラルスピン状態、Anyonsといったいわゆるファンシーな理論までいろいろと勉強させていただく機会がありました。なんでもありといえば言い過ぎだとは思いますが、高温超伝導がそのきっかけとなり、摂動計算、RVB状態からAnyon超伝導までいろいろなアイデアが次々と登場し、それらが現実に実現しているかどうかは少し横においておくとして、なんいろいろなことが物性に関係しているのかという驚きを感じさせてくれた時代がありました。このなんでもありの時代が少し落ちついてからも磁場中の電子の問題関連でエッジ状態、量子群等、いろいろと私の現在の研究にもつながる面白い問題に出会うことができ、このある意味で面白くまた良い時代（だったのでしょうか）を物性研で助手として過ごすことができ大変ではありましたが、とてもよかったですと感じています。特に甲元先生にはサイエンティフィックな面は勿論のことそのオリジナリティーを重視する態度をはじめとして、いろいろと陰に陽にご指導いただき非常に感謝いたしております。

振り返って考えてみると、物性研が日本での物性研究の中心であることは自他ともに認めるところでありましょうが、海外の第一線の研究者が数多く訪れセミナーをはじめとしていろいろな研究交流が盛んであることを実体験として感じました。私の感じた物性研のinternationalな雰囲気は甲元先生はじめ、所員の諸先生方のご努力の結果とは思いますが、その情報量は物性研ならではのすばらしい点だと感じています。実際、研究室に滞在されたGilles Montambaux, Yong-Shi Wu, Anthony Zee, Yshai Avishaiの諸先生とは物理のみならず親しくしていただき、いくつかの論文もまとめることができました。また物性研に滞在されたB. I. Halperin先生にはエッジ状態の研究につながる非常に有益な議論をしていただきましたことを覚えております。物性研の外に出た

ものとしては、今後もその最新の情報にできるだけふれられるようオープンな研究会、セミナー等が今後とも数多く開かれることを期待しております。

物性研の助手は5年で一応出ていくことになっていてそれなりのプレッシャーがあるわけで確かに大変なわけですが、外に出てみると物性研の助手ほどDutyのない職というのも他にないわけで「研究」という面でみればまさにすばらしい職であることを最近、学部へ移動して再認識することができました。(それ故、より一段と厳しいわけでもあります。) 私も、この「Duty Free」な状況を使わせていただき1992年から1993年まで米国Boston MITに滞在し、Patrick Lee, Xiao-Gang Wenの諸先生はじめ何人かの若手研究者と親しくしていただき、また共同研究を行うことができました。

最近、教官任期制というのが話題になっていますが、その面でも物性研の助手は良かれ悪かれ最先端をいっていたわけです。そのためか理論の助手の私のいた頃の入れ替わりはあっというまで、最若手であったと思っていたら、あれよあれよという間に最長老(理論の助手の)となってしまったことを覚えています。

また、私が物性研に採用していただく以前の物性研のイメージ(もしくは噂)として「厳しい先生方がたくさんいて、若手がつまらないセミナー等をすると、こてんぱんにやっつけられてしまう」というのがあり私は少々緊張しておりました。そのような私ですが、諸先生方、他の研究室の助手の方々等若手の人々にもいろいろと助けていただき研究以外の面でも何とか過ごすことができました。最近では大学院の学生の数も驚くほど増加し、私が物性研を出る頃には、採用になった時とは研究所の雰囲気が以前にも増して一段と変わったと感じました。きっとそれはそれで新しい物性研のすばらしい姿なのだと思います。

物性研は近々、柏の新キャンパスに移ることが決まっていると聞いています。すると私の過ごした六本木の物性研がなくなっちゃう寂しい気もしますが、新キャンパスで物性研が大展開されることをお祈りしてこの小文を終わりにしたいと思います。

物性研に着任して

松田祐司

4月1日付で北海道大学から物性研新物質科学部門の助教授として着任いたしました。1月にまさか採用されるとは思ってもいなかった物性研からの採用通知を受け、それ以降は研究室の引っ越し、札幌で購入したマンションの売却を含む自宅の引っ越しであわただしく時が過ぎてしまいました。現在もなお引っ越しの後始末や新しい実験室の配管等に明け暮れる毎日を送っていますのまだ一息つける状態にも至っておりません。

私は大学院時代は物性研（中性子回折部門）に所属しておりました。その後東大教養学部基礎学科の助手を5年、プリンストン大学で研究員を1年、北海道大学理学部物理学教室で助教授を4年間つとめましたので10年ぶりに物性研に戻ってきたことになります。この間行ってきた研究は主として高温超伝導体の超伝導状態の研究です。超伝導の研究は大学院の博士過程の時、当物性研の助手から分子科学研究所に移られた佐藤正俊先生（現名古屋大学教授）の指導の下で行ったモリブデンプロンズの研究から始まりました。助手時代は小宮山進先生の研究室で主として高温超伝導体の薄膜における超伝導現象の研究を行いました。特に京都大学化学研究所の坂東、寺嶋グループにより作成された高温超伝導体の超薄膜の磁場中輸送現象の測定を行いました。この薄膜は高温超伝導体の1ユニットセルの厚さしかもたず文字通りの超薄膜で、おそらく現存する最も薄いクリーンな超伝導体であると考えられます。当初高温超伝導体のような複雑な結晶構造を持つ物質でこのような膜ができるとは全く信じられなかったのですが、寺嶋先生からいろいろなデータを見せていただいたときにはただただ感心するのみでした。我々はホール効果や磁気抵抗の測定によりこの膜ではゼロ磁場でもかなりの数の渦と反渦が熱励起されていることを見つけ、この超伝導転移はいわゆるKosterlitz - Thouless 転移により起こっていることを示すことができました。

プリンストン大学ではOng教授の研究室で研究を行いました。Ong教授はCDWや高温超伝導体の輸送現象の研究で有名な方ですが、この研究室に行ってみてまず驚いたことは9Tの超伝導磁石の他はほとんど高価な装置を持っておらず、おそらく研究設備としては日本のいわゆる貧乏な研究室と大差ないことでした。研究はお金と設備ではないということを痛感させられました。ここでは高温超伝導体の磁場中のマイクロ波表面インピーダンスの測定を行いました。高温超伝導体の表面インピーダンスは非常に小さいためマイクロ波検出にボローメータを使いました。しかし実験は失敗に次ぐ失敗で初めてデータが出たのは帰国の1ヶ月前でした。その結果高温超伝導体の渦糸の粘度を測定することができ、高温超伝導体のフラックスフロー状態はかなり通常の超伝導体と異なることがわかりました。フラックスフロー状態は渦糸のコアの回りの準粒子状態と密接にかかわっていることから我々はコア内部の準粒子状態の特異性から来ているのではないかと考えました。高温

超伝導体の渦糸はコヒーレンス長が短いこととクーパー対の対称性がd波であることから通常の超伝導体とはかなり異なることが予想されていますが、具体的には現在でも実験、理論とともに未だ良く分かっていない問題です。

北大に赴任してからはNMRを主として実験を行っている熊谷健一先生と共同で高温超伝導体の渦糸状態の研究を引き続き行いました。北海道大学は札幌市の中心部に広大なキャンパスを持ち、おそらく日本で最も美しいキャンパスを持つ大学の一つではないでしょうか。とくに北海道でしか味わうことのできない四季折々の美しさはすばらしいものがあります。しかし広大なキャンパスゆえに最も苦労したのは液体ヘリウムと窒素の運搬でした。我々の研究室は教養部の建物の中にあったのですがここは低温液化センターから1.5kmほど離れたところにあり、学生さんがここから液体ヘリウムと窒素をリアカーで毎週運んできます。ところが冬は雪と氷のために運搬が非常に大変になります。いろいろ橇とかを作ったようですがあまり役に立たなかったようです。特に2年前の札幌は記録的な大雪に見舞われ吹雪の中ヘリウムを運んできた学生さん達は全身まっ白で昔映画で見た「八甲田山」の雪中行軍のようでした。まさにヘリウムの一滴は血の一滴と誰かが言ったことを思い出しました。北大ではマイクロ波の実験をロシアからの留学生のガイフーリンさんと一緒に始めました。そのころちょうどプリンストン大で前述の装置を使って引き続き実験を行っていた大学院生がBi系の高温超伝導体で奇妙なマイクロ波共鳴吸収を見つけたと報告してきました。渦糸状態で何らかの共鳴現象が観測されるのは興味深く、当初この共鳴現象に対してはいろいろな解釈がありました。我々は北大でこの共鳴現象が超伝導面に垂直方向の電子の運動から来ていることを明らかにしました。ちょうどそのころ学会で東北大学金研の立木先生が面に垂直方向のプラズマ振動による光の完全反射の理論をされていたのを聞き、我々が観測したのはこのプラズマ振動の共鳴に違いないと考えました。現在ではほぼこの解釈は確立しこの共鳴はジョセフソン・プラズマ共鳴とよばれています。このプラズマ現象は超伝導体の電磁現象として面白いだけではなく、プラズマは渦糸と強く結合しますので渦糸状態を探る強力なプローブとなります。高温超伝導体の渦糸状態は通常の超伝導体で良く知られたアブリコソフ格子状態が熱ゆらぎのために融解して渦糸液体状態となる事が知られています。またランダムネスの効果のため渦糸グラス、ボーズグラスといった新しい渦糸相の存在も指摘されています。現在プラズマ共鳴によりこれらの相を探る研究をガイフーリンさん、青山学院大学の大学院生の小杉さんと共同で行っています。このジョセフソン・プラズマ共鳴は最近では本郷のグループにより有機超伝導体でも発見され少なからず驚かされました。我々はマイクロ波の研究とは他に渦糸状態におけるホール効果の測定も行ってきました。高温超伝導体では渦糸状態でホール効果の符号が逆転します。この現象は高温超伝導体の発見直後から見つかっておりその原因について論じた膨大な数の論文がありますがいまだに解明されていません。最近ではボルテックスが電荷を帯びていることとの関係から論じられています。このホール効果に関しては北大の大学院生の永岡さんと一緒にドーピング依存性を測定しています。最近の実験からこ

の逆転現象はアンダードープ領域のみで起こりオーバードープ領域では起こらないことが分かってきました。もしそうならかなりの理論が修正される可能性があります。

高温超伝導体の研究には主として2つの流れがあるように思います。一つは高温超伝導体のメカニズムを探る研究であり、もう一つは超伝導状態、特に渦糸状態の研究です。前者は固体電子論の大問題の一つである事は言うまでもありません。また後者は超伝導の現象論と言うべき研究であり直接超伝導のメカニズムとは関係してはいませんがこれも重要な問題です。実際海外の学術雑誌を見てみると両者の研究の割合は同じ程度に見えます。残念なことに日本では、前者の研究では実験、理論ともに世界をリードする研究が数多くあるのに対し、後者の研究に関してはかなり世界の趨勢に取り残されている感を持ちます。渦糸状態の研究は超伝導の現象論ですから理論と実験の密接な議論が必要なのですが、日本ではこの問題に興味を持つ理論家の絶対数が少ないためかもしれません。これはこの分野における今後の課題であると思います。

最後に柏移転に伴いこれから大変な時期に差し掛かると思います。移転前にできるだけ早急に六本木でも研究室を立ち上げ実験データを出せるよう努力したいと思っております。

物性研究所談話会

日 時 1997年5月12日（月）午後1時30分～2時30分

場 所 物性研究所 Q棟1階講義室

講 師 松 田 祐 司 氏

(所属) (東京大学物性研究所)

題 目 マイクロ波で探る高温超伝導の渦糸状態

要 旨

高温超伝導体の渦糸状態は通常の超伝導体とは大きく異なることが知られている。我々はマイクロ波を用いて渦糸状態の研究を行ってきた。ここでは以下のことを中心に議論する。

1. マイクロ波により渦糸の粘度を測定した結果、渦糸コア内部での準粒子散乱時間は極めて長くなっている。このことと渦糸内部での準粒子のエネルギー構造の関係について議論する。
2. 大きな異方性のために超伝導面に垂直方向のプラズモンは、励起エネルギーが超伝導ギャップよりも小さくなりランダウ減衰せずに安定に存在する。最近我々はこのプラズマ（ジョセフソン・プラズマ）をマイクロ波の共鳴吸収として観測した。この共鳴現象を用いることにより渦糸状態をジョセフソン接合の観点から研究した。特に渦糸格子の融解現象、渦糸液体状態、ボーズグラス状態等における面間位相コヒーレンスについて議論する。

日 時 1997年5月26日（月） 午後1時30分～2時30分

場 所 物性研究所 Q棟1階講義室

講 師 毛 利 信 男 氏

(所属) (東京大学物性研究所)

題 目 超高圧を主体とした極限環境における電子物性の研究

要 旨

酸化物高温超伝導体、ヘビーフェルミオン系物質等で見いだされてきた新規な現象は外部パラメータとしての圧力、温度、磁場に極めて敏感であり、その機構を解明する手がかりを得る手段として、極限環境下の実験研究が極めて有効であることが実証されつつある。これらの成果の背景には良質の試料の製作技術の進歩と、極限環境の精密なコントロールを可能にした技術開発がある。ここでは、我々の研究室で開発してきた低温・超高圧装置で得られた結果を中心に最近の成果を紹介し、電子物性の研究における極限環境手段の役割を論ずる。

日 時 1997年 6月30日（月） 午後 1時30分～2時30分

場 所 物性研究所 Q棟 1階講義室

講 師 田 中 虔 一 氏

(所属) (東京大学物性研究所)

題 目 アトムプロセスとして見る金属表面の変化

要 旨

金属表面が気体と触れる種々の現象が起きるが、多くの人はこれらの現象を全てを吸着として理解しようとしてきた。

金属表面の変化をアトムプロセスとして見ると、従来の吸着の概念では説明できない現象が多く存在していることが分かり、「疑似化合物の生成とその配列」と言う概念を導入することによって現象を統一的に理解できるようになった。この概念の導入によって現象を理解するだけでなく、化学的に新しい表面を創成出来るようになった。談話会では化学反応により疑似化合物 (- Cu - O -) を並べた Ag(110) 表面を創ったり、その反応によって全く分布のない $8 \times 8 \text{ Å}^2$ の大きさの $(\text{Cu})_6$ ドットを表面に合成できることを示す。

一方、酸素に触れた Cu(100) 表面の構造変化は30年余りに亘って解けない難問であったが、STMを用いて解くことに成功した。この問題は吸着の概念で、説明できる面白い例である。酸素原子は位相を異にするナノサイズの $c(2 \times 2)$ - O ドメインをつくって Cu(100) 表面を覆う。酸素原子は表面を動くがナノサイズの $c(2 \times 2)$ - O ドメインは大きくなることはなく、従ってドメインパウンドグリーの密度の高い表面が形成される。その原因は吸着に伴って生じる局所的なストレスを均一に分散させることにあると推論される。実際、大きな $c(2 \times 2)$ - O が生成するとストレスを解消するために Cu アトムが基盤から抜け、最終的には Cu 原子が規則的に抜けた $(2\sqrt{2} \times \sqrt{2})R45^\circ$ - O 構造が形成される。この Cu 原子が抜けた溝に Ni 原子を埋めることにより Ni の原子線 ($10 \times 500 \text{ Å}^2$) を Cu(100) 表面に生成に成功した。

人事異動通知

1. 研究部

(辞職・転出等)

所 属	職・氏名	発令日	備 考
先端領域研究部門	助手 大川祐司	9. 5. 31	辞職(理化学研究所研究員へ)
極限環境物性研究部門	助手 秋元彦太	9. 5. 31	休職(10.2.28まで)
附属軌道放射物性研究施設	助教授 柿崎明人	9. 6. 1	高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所教授へ
物性理論研究部門	助手 木野日織	9. 6. 30	辞職(技術研究組合オングストロームテクノロジ研究機構研究員へ)

(採用)

所 属	職・氏名	発令日	異動内 容
先端領域研究部門	助教授 吉信淳	9. 7. 1	理化学研究所副主任研究員から

(併任)

所 属	職・氏名	発令日	備 考
附属軌道放射物性研究施設	教授 柿崎明人	9. 7. 1	本務:高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所教授 (10.3.31まで)

2. 事務部

(転入)

所 属	職・氏名	発令日	異動内 容
附属中性子散乱研究施設	事務室主任 堀圭一郎	9. 6. 1	工学部・工学系研究科産業機械工学科事務室主任から

(配置換)

所 属	職・氏名	発令日	異動内 容
経理課	会計主任 松原嘉彦	9. 7. 1	薬学部会計主任へ

東京大学物性研究所助手公募の通知

下記のとおり教官の公募をいたします。適任者の推薦、希望者の応募をお願いいたします。

1. 研究部門名等及び公募人員数

新物質科学研究部門 松田研究室 助手1名

2. 研究 内 容

超伝導体の高周波電磁応答や輸送現象等の実験的研究に強い興味を持ち、当該分野における物性測定手段の改良、開発にも意欲を持つ研究者を希望。この分野の経験は問わない。

3. 応募資格

修士課程修了、又はこれと同等以上の能力をもつ者。

4. 任 期

5年以内を原則とする。

5. 公募締切

平成9年9月30日（火）必着

6. 就任時期

決定後なるべく早い時期を希望する。

7. 提出書類

(イ) 推薦の場合

- 推薦書（健康に関する所見を含む）
- 履歴書（略歴で良い）
- 業績リスト（必ずタイプすること）
- 主要論文の別刷

(ロ) 応募の場合

- 履歴書
- 業績リスト（必ずタイプすること）
- 主要論文の別印
- 所属の長又は指導教官等の本人についての意見書（宛先へ直送のこと）
- 健康診断書

8. 宛先

〒106 東京都港区六本木7丁目22番1号

東京大学物性研究所 総務課人事掛

電話 03(3478)6811 内線 5022, 5004

9. 注意事項

新物質科学研究部門松田研究室助手応募書類在中、又は意見書在中の旨を朱書きし、書留で郵送のこと。

10. 選考方法

東京大学物性研究所教授会で審査決定いたします。ただし、適任者のない場合は、決定を保留いたします。

平成9年5月23日

東京大学物性研究所長

安岡弘志

東京大学物性研究所助手公募の通知

下記のとおり教官の公募をいたしますので、適任者の推薦、希望者の応募をお願いいたします。

1. 研究部門名等及び公募人員数

物性理論研究部門 安藤研究室 助手 1 名

2. 研究内容

当研究室では、メソスコピック系や量子ホール系などの低次元電子系を主な対象として、多体問題や量子輸送現象の研究を行っている。この分野の研究経験は問わないが、新しい研究に意欲的に取り組む若手研究者を希望する。

3. 応募資格

修士課程修了、又はこれと同等以上の能力をもつ者。

4. 任期

5年以内を原則とする。

5. 公募締切

平成9年10月31日（金）必着

6. 就任時期

決定後なるべく早い時期を希望する。

7. 提出書類

(イ) 推薦の場合

- 推薦書（健康に関する所見を含む）
- 履歴書（履歴で良い）
- 業績リスト（必ずタイプすること）
- 主要論文の別刷

(ロ) 応募の場合

- 履歴書
- 業績リスト（必ずタイプすること）
- 主要論文の別刷
- 所属の長又は指導教官等の本人についての意見書（宛先へ直送のこと）
- 健康診断書

8. 宛 先

〒106 東京都港区六本木 7 丁目22番 1号
東京大学物性研究所 総務課人事掛
電話 03 (3478) 6811 内線 5022, 5004

9. 注 意 事 項

物性理論研究部門安藤研究室助手応募書類在中、又は意見書在中の旨を朱書し、書留で郵送の
こと。

10. 選 考 方 法

東京大学物性研究所教授会で審査決定いたします。ただし、適任者のない場合は、決定を保留
いたします。

平成 9 年 6 月 26 日

東京大学物性研究所長

安 岡 弘 志

Technical Report of ISSP 新刊リスト

Ser. A

- No. 3240 Low-temperature Magnetic Properties of Several Compounds in Ce-Pd-X (X=Si, Ge and Al) Ternary Systems, by J. Kitagawa, Y. Muro, N. Takeda and M. Ishikawa.
- No. 3241 High-temperature Spin Dynamics in the $S=1/2$ Spin Ladder $(VO)_2P_2O_7$ Studied by ^{31}P NMR, by Jun Kikuchi, Touru Yamauchi and Yutaka Ueda.
- No. 3242 Proposed Synthesis Path for Hetero-diamond BC_2N , by Yoshitaka Tateyama, Tadashi Ogitsu, Koichi Kusakabe, Shinji Tsuneyuki and Satoshi Itoh.
- No. 3243 Detailed Analysis of the Commensurability Peak in Antidot Arrays with Various Periods, by Satoshi Ishizaka and Tsuneya Ando.
- No. 3244 Atomic-scale Fabrication of Metal Surfaces by Using Adsorption and Chemical Reaction, by Ken-ichi Tanaka, Yuji Matsumoto, Takeya Fujita and Yuji Okawa.
- No. 3245 Superconducting Properties of Layered Perovskite $KCa_2Nb_3O_{10}$ and $KLaNb_2O_7$, by Yoshihiko Takano, Shigeru Takayanagi, Shinji Ogawa, Tokio Yamadaya and Nobuo Mori.
- No. 3246 Crystal Growth of A New Spin-Peierls Compounds NaV_2O_5 , by Masahiko Isobe, Chiharu Kagami and Yutaka Ueda.
- No. 3247 Transfer-Matrix Study of Hard-Core Singularity for Hard-Square Lattice Gas, by Synge Todo.
- No. 3248 High Magnetic Field Studies of Tunnelling Through X-Valley-Related Silicon Donor States in GaAs/AlAs Heterostructures, by Robin K. Hayden, Laurence Eaves, Igor E. Itskevich, Noboru Miura, Mohamed Henini and Geoff Hill.

- No. 3249 Spin Fluctuation in S-1/2 Double Linear Chain γ - LiV_2O_5 Studied by ^7Li -NMR, by N. Fujiwara, H. Yasuoka, M. Isobe, Y. Ueda and S. Maesawa.
- No. 3250 A Theoretical Analysis of the Magnetic Circular Dichroism in the 2p3d and 2p4d X-ray Emission of Gd, by F.M.F. de Groot, M. Nakazawa, A. Kotani, M.H. Krisch and F. Sette.
- No. 3251 Calculation of 3s Photoemission Spectra of Vanadium on Graphite, by P. Krieger, M. Taguchi, J.C. Parlebas and A. Kotani.
- No. 3252 Magnetic Field Dependence of the Low-Temperature Specific Heat of the Borocarbide Superconductor $\text{LuNi}_2\text{B}_2\text{C}$, by Minoru Nohara, Masanobu Issiki, Hidenori Takagi and R.C. Cava.
- No. 3253 Effect of Na-deficiency on the Spin-Peierls Transition in $\alpha\text{-NaV}_2\text{O}_5$, by Masahiko Isobe and Yutaka Ueda.
- No. 3254 Oxygen Nonstoichiometry and Superconductivity of $\text{LaBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_y$, by Kenji Otzschi and Yutaka Ueda.
- No. 3255 Defect-Induced Persistent Hole Burning in MgO-doped $\text{Pr}^{3+}\text{:YAG}$ Systems, by Tohru Suemoto, Tsuyoshi Okuno and Daiju Nakano.
- No. 3256 Anisotropic Resistivity of $\text{YBa}_2\text{Cu}_4\text{O}_8$ - Incoherent to Metallic Crossover in the Out-of Plane Transport, by N.E. Hussey, K. Nozawa, H. Takagi, S. Adachi and K. Tanabe.
- No. 3257 Quasi-Particle Spectra around a Single Vortex in a d-Wave Superconductor, by Yoshifumi Morita, Mahito Kohmoto and Kazumi Maki.
- No. 3258 Profile of Periodic Potential Modulation Probed by Magnetoresistance Oscillation of a Two-Dimensional Electron Gas, by Mayumi Kato, Akira Enro and Yasuhiro Iye.
- No. 3259 A Quantum Monte Carlo Method and its Applications for Multi-Orbital Hubbard Models, by Yukitoshi Motome and Masatoshi Imada.

- No. 3260 Phase Transition in the One-Dimensional Kondo Lattice Model with Attractive Electron-Electron Interaction, by Naokazu Shibata, Manfred Sigrist and Elmar Heeb.
- No. 3261 Direct Observation of One-by-One Cu Atoms Releasing on Cu(100) Induced Oxygen and Restructuring to $(2\sqrt{2} \times \sqrt{2})R$ 45° -O Surface, by Takaya Fujita and Ken-ichi Tanaka.
- No. 3262 Molecular Dynamics Simulation Study of the Behavior of Molecuar Crystal Tin Tetraiodide under Hydrostatic Pressure, by Kazuhiro Fuchizaki, Masaharu Isobe, Yasuhiko Fujii, Kyoko Sato and Nozomu Hamaya.
- No. 3263 Oxygen Nonstoichiometry, Structure and Physical Properties of $\text{CaVO}_{3-\delta}$, I. A Series of New Oxygen-Deficient Phases, by Yutaka Ueda.
- No. 3264 Transport Properties of Doped t - J Ladders, by Hirokazu Tsunetsugu and Masatoshi Imada.
- No. 3265 Magnetic Behavior of Mn_3GaC under High Magnetic Field and High Pressure, by Kenji Kamishima, Tsuneaki Goto, M.I. Bartashevich, Makoto Kikuchi and Takeshi Kanomata.
- No. 3266 Magnetization Process of the Spin-1/2 XXZ Models on Square and Cubic Lattices, by Masanori Kohno and Minoru Takahashi.
- No. 3267 Electron Spin Resonance in Spin-Peierls Compounds NaV_2O_5 , by A.N. Vasil'ev, A.I. Smirnov, M. Isobe and Y. Ueda.
- No. 3268 Neutron Diffraction Study of the Magnetic Ordering in $\text{Ce}_{0.9}\text{La}_{0.1}\text{P}$ under High Pressure, by Yasuaki Oohara, Masato Kubota, Hideki Yoshizawa, Hiroki Takahashi, Nobuo Mori, Yoshinori Haga, Akihiko Uesawa and Takashi Suzuki.
- No. 3268 Low-lying Excitations around a Single Vortex in a d-Wave Superconductor, by Yoshifumi Morita, Mahito Kohmoto and Kazumi Maki.

- No. 3270 One Dimensional Growth of Ni-island on a Cu(100)($2\sqrt{2} \times \sqrt{2}$) R45° -0 Surface, by Takaya Fujita, Yuji Okawa and Ken-ichi Tanaka.
- No. 3271 Influence of Resistive Wall Impedance on the VSX Light Source, by Norio Nakamura and Tadashi Koseki.
- No. 3272 Performance of the Single-pass Position Monitor at SOR-RING, by Hirofumi Kudo, Kenji Shinoe, Hiroyuki Takaki, Tadashi Koseki, Norio Nakamura, Yukihide Kamiya and Tohru Honda.
- No. 3273 Simulations on False Gain in Recombination-pumped Soft-x-ray Laser, by Tsuneyuki Ozaki and Hiroto Kuroda.
- No. 3274 High Power Test of the RF Damped Cavity, by Tadashi Koseki, Masaaki Izawa, Kenji Shinoe, Syuichi Tokumoto, Yukihide Kamiya, Toshi Miura and Kiyokazu Satoh.
- No. 3275 Exclusion Quasiparticles and Thermodynamics of Fractional Quantum Hall Liquids, by Y.S. Wu, Y. Yu, Y. Hatsugai and M. Kohmoto.
- No. 3276 The Luminescence of Germanium Microscystallite Excited Selectively, by Akira Saito and Tohru Suemoto.

編 集 後 記

物性研だよりの 7 月号をお届けいたします。

素麺の美味しい季節になりましたが、いかがお過ごしですか。浴衣で西瓜を食べながら花火大会というのも又、待ち遠しいです。花火と言えば、7 月 1 日の香港の中国返還の歴史的な瞬間を思い出される方も多いのではないでしょうか。

今号に、石井先生と初貝先生から退所後のたよりを頂きました。原稿をお寄せ下さった方々、お忙しい中大変有難うございました。これからも、皆様に御愛読いただける物性研だよりを目指していきたいと思います。

なお、次号の締切りは 8 月 8 日です。

所属又は住所変更の場合等は事務部共同利用掛まで連絡願います。

白 石 潤 一
毛 利 信 男

